

秋ヶ瀬取水堰

～武蔵水路により導水した利根川や荒川の水を取水し、首都圏の水不足を解消した施設～

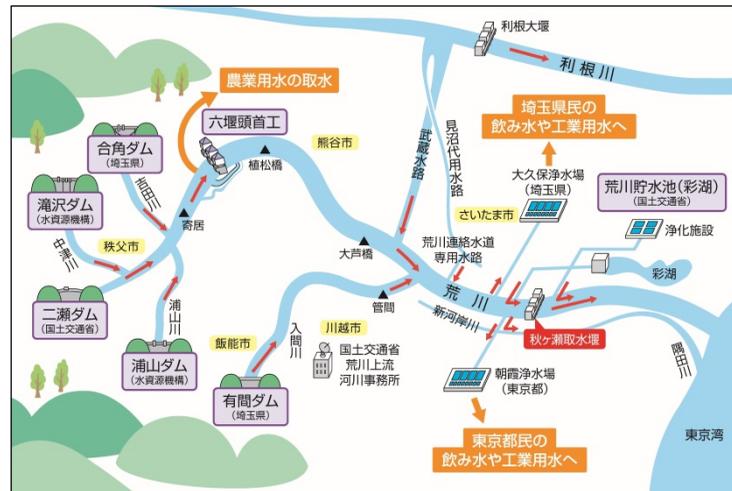
東京都と埼玉県の水道用水、工業用水および隅田川の浄化用水を取水するための堰です。



下流側から見た秋ヶ瀬取水堰。一番左が普段水を流している調節ゲート、その右が増水時に開放される三連の洪水吐ゲート、右端に魚道があります。



秋ヶ瀬取水堰には魚道も設置されています



秋ヶ瀬取水堰位置図

秋ヶ瀬取水堰とは

荒川河口から約35km上流の志木市の河川湾曲部に新川開削して設置した可動堰です。

昭和三十年代後半から日本は高度経済成長期を迎え、東京周辺への人口集中が激しく、都市の飲料水の不足が問題となります。秋ヶ瀬取水堰は、東京砂漠とも呼ばれた水不足を利根川からの導水により解決するべく進められた、利根導水路事業の一環として建設されました。

武蔵水路から荒川に注水され、自然流下(約30km)した利根川の水も合わせて東京都や埼玉県の水道用水、工業用水、さらには隅田川の浄化用水として使用するために取水を行っています。総取水量は約65m³/sで、堰脇の取水口から取水している東京都上水が約43%、隅田川の浄化用水が約36%、約5km上流で取水している埼玉県上水が約18%。堰の幅は127m、4カ所の可動式ゲートで構成され、魚道も設置されています。

秋ヶ瀬取水堰は、1964(昭和39)年に暫定通水、1965(昭和40)年に完成し、朝霞水路によって導水されました。

▶ 利根導水事業の概要

東京では戦後の経済復興に伴い水需要が急激に増え、1964（昭和39）年の東京オリンピックを前に水不足が深刻になってきました。

この問題を解決するために利根川水系の水を大規模に利用する計画が立てられ、1962（昭和37）年に「利根川水系水資源開発基本計画」が決定しました。

その概要は、利根川上流の群馬県内にダムを建設し湧水期のための水を確保する。行田市及び千代田町の利根川に「利根大堰」を建設し、そこで取水した利根川の水を「武蔵水路」（14.5km）を通し鴻巣市で荒川に放流する。志木市宗岡の荒川に「秋ヶ瀬取水堰」を建設し、取水した水を「朝霞水路」（2.1km）で朝霞浄水場（東京都水道局）等へ導水し利用するというものです。主要工事は1962（昭和37）年に設立された水資源開発公団（現、独立行政法人水資源機構）が担当しました。

▶ 秋ヶ瀬取水堰及び朝霞水路の工事

取水堰は荒川が旧浦和市側に蛇行した部分を利用し、これをショートカットする位置に取水堰を設けることとしたため、本体工事は陸上で施工することができ、工期短縮が可能となりました。

取水堰の直上流脇の取水口から朝霞浄水場等に水を送る朝霞水路は箱型コンクリートの暗渠水路で荒川堤防を樋管で横断し、新河岸川左岸に建設した沈砂池に至りますが、ここで一部を分岐させ隅田川の浄化用水を放流するため新河岸川へつなぎ（新宮戸橋下流側）、沈砂池を経た水は新河岸川の下を伏せ越し（逆サイフォン）でくぐり右岸の東京都の施設につなげました。これらの工事はわずか11カ月の工期で1964（昭和39）年8月に竣工し、オリンピックの開会1カ月前に通水開始されました。



改修前の地図
1881（明治14）年測量



改修後の地図
2003（平成15）年測量

コラム 東京一大きな朝霞浄水場

朝霞浄水場（埼玉県朝霞市）は、1966（昭和41）年10月の運用開始後、数度の拡張工事を経て、東京都水道局で一番の施設能力（東京都水道局の浄水場全体の施設能力（約686万 m^3 /日）の約1/4にあたる170万 m^3 /日（東京ドーム約1.5杯分））を持つ日本有数の大規模浄水場として、日々“東京水”の供給を行っています。運用開始以来50年にわたり利根大堰、武蔵水路、秋ヶ瀬取水堰及び朝霞水路を通じ、朝霞浄水場に利根川・荒川から取水した水道水の原水を導水しています。



朝霞浄水場

アクセス

秋ヶ瀬取水堰

交通：JR「浦和駅」下車、バス15分（志木駅東口行「秋ヶ瀬橋」下車）、徒歩約5分

住所：埼玉県志木市宗岡



秋ヶ瀬取水堰

